
どこかへ帰りたい

浅葉りな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どこかへ帰りたい

【Nコード】

N2819C

【作者名】

浅葉りな

【あらすじ】

記憶を失い、モノクロームの世界でただひたすらに同じような日々をくりかえす少年の物語。

シロ。

クロ。

アオ。

たった三つしか色の存在しないこの世界で、トキの流れに取り残されて。

いつ終わるとも知れない日々を、いつ終わるとも知れない仕事で埋めながら生きている。

十

彼は気づけばここにいた。

目的があるわけでも、なにかしているわけでもなく、ただ存在していた。

まわりにあるのは機械。

ボタンのたくさんついたパネルや大小取り混ぜた歯車や、太さがさまざまなコードやよくわからない回路みたいなものが所狭しと並んでいて、彼のまわりで時折うなりをあげたり点滅してみたりしていた。

彼の手の中にあつたのは、時計と望遠鏡だった。

けれどその時計には針がなく、望遠鏡にはレンズがなかった。

こんなところでこんなものを使って、いったい自分はなにをしていたんだろう。

彼は考えた。

わかるはずはなかったのに。記憶がないのだ、彼には。

過去がないといつてもよかった。

それでも、なにかをしなくてはいけないという気持ち、それは強かった。

ベッドしかない部屋を出て、機械の森を抜けてどこまでも行くと、不思議な場所がある。

ほかと少しだけ違って、そこには機械がなかった。つるりとした材質の、向こう側が透けて見えるらしい壁があるだけだった。

壁の向こう側には深い闇色の空間があり、ところどころに白い点がある。白い点はゆっくりと動いていたので、向こうが透けているのだと彼にもわかったのだった。

動く白い点の中、動かないものがひとつだけある。

青と白のまだら模様の丸いものだ。

近づいて壁に身を寄せて、それを見ながらため息をつく、目の前の闇がわずかに白で希釈された。

びっくりしてこすってみる。白はすぐに消えてしまう。

しばらくその光景を眺めていたそのあとで、彼の指はパネルに伸びる。どういう意味があるのかは知らない。けれどそれは、欠かすことはできないと、知っていることなのだった。

+

そういえば、と彼は思う。

ほかに人間はいないのだろうか、と。

自分が人間だということくらい、彼は知っていた。誰に教えられたわけでもなく。

ということとは、昔、誰かといっしょにいたことがあるということなのだろう。

だとしたら。

どうしてここにいるのだろう。たったひとりで。

彼のいる場所は冷たかった。

黒。

白。

青。

たった三つの彩りしかなくて。

熟れたりんごのような赤も、輝く月のような黄色も、春になると示しあわせたかのように芽吹く若木の緑色も存在しないのだ。

ここはどこ？

自分は誰？

気が狂いそうな静寂の中、いくども彼は自問する。

せめて鏡があつたなら、姿くらいはわかるだろうに。

大事に大事に抱えていた時計を見る。

針のない時計。役に立たないもの。

彼も同じだった。空っぽだった。

ぼたり

文字盤に液体が落ちた。涙だった。

彼は上を向いた。そうしていれば、涙は流れないだろうから。

十

「いやだー！」

冷たい金属でできた円筒形の《船》に押し込まれながら、彼は喉がひりつくほどの叫びをほとばしらせた。

「アリーン、これは決定だ」

顎鬚をたくわえた、白衣の研究員が言った。額や目じりや口許には、長年の苦労をうかがわせる深いしわが刻まれている。

「もうウィルスに侵されていないのは、おまえひとりだ。このままでは、生命は死滅するだろう」

「そんなもの知らない！」

アリーンはなおも食い下がる。両手を押さえて中へと押し込もうとする四人の研究員に抵抗しながら、年老いた研究員を見つめた。

「おまえは唯一、正常な遺伝子を持っている。ここから逃れ、大地

が浄化されるまでのあいだ、宇宙に逃れてもらいたい」

「それならば、滅びればいい。宿命に従って、星を屍で埋めつくせばいい！」

今、この星は死にかけているのだった。

人間が戦争のために生み出した生物兵器は、すべての生物の遺伝子を蝕み、じわじわと死に至らしめていた。

ウィルスは生物の遺伝子を模して体内に入り込み、あたかもそれが正常な遺伝子であるかのように見せかけて、それを増やすのだ。体細胞すべてが癌化すると言ってもいいかもしれない。表面上は変わりがないが、それは動かしがたい事実であった。

ウィルス自体はとても弱い。が、いかなる手段を用いても、駆逐することはできないのだ。はじめは空気感染であったウィルスは、今は遺伝子の中に潜み、親から子へと受け継がれるゆえ。

「だから！」

老いた研究員は首を振った。ゆっくりと。

「……だめだ」

アリーンはついに《船》へと押し込まれてしまう。

空気の漏れるような音がして、扉が閉まった。外からの音がなくなる。

もう、いくら叫んでも外には聞こえないだろう。

扉には窓がついていて、悲痛な顔をした人々が見える。

彼らには未来はないのだ。遺伝子異常は表面に見えないものの、確実に身体を蝕んでいくはずだった。異常のおかげで、いまや人間の平均寿命は二十年ほどにもなってしまう。二十年の間に、駆け足で年を取っていくのだ。

そして、人々に重なって、窓にアリーンが映っていた。

極細ファイバーのような金髪と、ラピスラズリのような蒼い瞳。二十三歳ほどに見えるが、本当はまだ十八だ。ほかの人間に比べ、これでも実年齢との差が少ない。彼は、もっとも正常に近い遺伝子を持ちあわせていたので。

けれども、ひとりでは行けないと思った。

星には、彼女が残っているのだ。

「フィー……」

アリーンは彼女の名を呼んだ。

人々がふたつに割れ、ひとりの女性——フィーが姿を現す。

足首まで届くウェーブのかかった銀髪の美しい、アリーンによく似たフィーな紅の瞳を優しげに笑ませている。

彼女のくちびるが動いた。言葉に乗せて、ゆっくりと。

+

彼は目を覚ました。

パネルに並ぶボタンを叩きながら、彼は寝入ってしまったらしかった。

夢はどっちなのだろう、と彼は思う。夢の中で彼はアリーンと呼ばれていて、母星から追い出されようとしていた。

仲間たちから星を追われることと、ひとりでここに在ることと。

いったい、どちらがより辛いのだろう。

どちらも夢であればいいのに。

すべては悪い夢で、気づけば寮のベッドで寝ていて——

けれど、だめなのだ。そんなことがあるはずがない。

アリーンは拳をパネルに叩きつけた。パネルとつながっているディスプレイが明滅する。

エラー。

そんな意味の言葉が画面上で躍っていた。

+

このままではいけない。

ふと、アリーンは思い立った。

モノクロームの中に蒼が差し色されたようなこの世界で、いつまでもいつまでも、まどろんでいていいわけがない。真実は明かされなければならぬ。それがどんな結果を導くのだとしても。

彼は今まで、このプライヴェート・ルームとあの透明な壁に囲まれた部屋とを行き来しているだけだった。そう、それは太陽が東から昇り西へと沈むことに似て。

ずっと抱えていた望遠鏡を、かたくて寝心地の悪いベッドの上に傷つけないようにそっと下ろした。

そうして、部屋を出る。ベッド以外にはなにもない部屋を。

こんなことをするのはじめてだった。

普段は目もくれずに通り過ぎるドアの前で立ちどまり、中をのぞいてみる。

大概、中にはなにもない。そんな中、アリーの興味を引いたものがひとつだけあった。

広い部屋の真ん中に、ぽつんと、群れからはぐれた渡り鳥のようにイーゼルが立ててあり、その上にはスケッチブックが乗っていた。開いてみると、書いてあったのは水彩画と詩だった。

紙に触ると、水でふやけたあとに、ふたたび乾いたかのようなでこぼこ感があった。色彩はなかったが、なにより色鮮やかだった。

一ページめには星の海が描いてあった。吸い込まれそうなほどに深い広がりを持った闇の中に、白い星がいくつもある。白いかすれたインクで、“どこへ行くんだろう？”と書きつけられていた。

めくる。

次は人物画。幸せそうに微笑むフィーが、一角獣とともにいた。木漏れ日のさす森で、フィーは一角獣の背にまたがって、風と一体になって駆けていた。

添えられた言葉は、“逢いたい、ひとめだけでも”。

三枚めは描きかけだ。真ん中に母星を宇宙から見た図があった。下書きだけで終わっている。上の方に“どこかへ帰りたい”と走り

書きがしてある。

あとのページは真っ白だった。

白。白。白。

白が目にくくて、まぶたを下ろした。

+

ウ・マ・レ・カ・ワ・ル・コ・ト・ガ・ア・ツ・タ・ナ・ラ・オ・
ナ・ジ・ホ・シ・ニ・ウ・マ・レ・マ・シ・ヨ・ウ・ネ。

——生まれ変わることがあったなら、同じ星に生まれましようね。

モ・ウ・ハ・ナ・レ・ナ・ク・ト・モ・ス・ム・ヨ・ウ・ナ・ヘ・
イ・ワ・ナ・ク・ニ・ニ・ウ・マ・レ・タ・イ。

——もう離れなくともすむような、平和な国に生まれたい。

フィーの花びらのようなくちびるから、紡がれることばたち。

アリーンはうなずいた。何度も、何度も。

「また逢おう、フィー」

大切な半身に向けて——

双子の妹に、彼は涙を流しながらうなずいて見せた。

もう現世で逢えないのなら、来世を希む以外にどんな方法がある
というのだろうか？

+

一瞬、まぶたの裏に浮かんだ光景を、彼は何度も反芻した。

フィー。双子の妹。

二卵性双生児で、アリーンと違って虚弱な娘だった。異常な遺伝
子は彼女にだけ受け継がれた……。

よみがえってくる。記憶が。

けれどそれはすべてではなくて、いまだ断片的だった。

やはり思いださなくて。いつまでもこうしているわけにはいか

ないのだから。

近づくにつれ、頭の中に、焼けた火かき棒でひっかきまわされたあとに、水を流し込まれたような痛みが強くなってくる。

憶いだしてはいけないよ。

憶いだしてはいけないよ、さあ、帰るんだ。砂糖菓子でできた甘い夢の中で、ずっとずっとまどろんでおいで。

頭に直接声が響く。

地下は禁忌。

そういう記憶はたしかにあった。

けれど理由は憶えていないのだ。

禁忌。

禁忌。

行ってはいけない。

エコーがかかって、頭の中を駆けめぐる。

そしてついに、梯子が終わり、かたい床に足がついた。

ここからは一本道だ。

まっすぐ進んでいけばいい。まっすぐ行っただその先に、必ず、なにかがあるだろうから。

一面、花が咲いている。

天上にも壁にも床にも、まるで絨毯かなにかのように青い花が咲き乱れていた。

（どこかへ、帰りたい）

ああ。ここを知っている。

（帰りたい——どこでもいいから、帰りたい）

どんなにか強く願ったことだろう。

（どこでもいい。誰か、なにか、生きもののいるところへ）

この花に囲まれるようにして、眠っているはずだ。

（どうしてなにもないんだ？）

花は棺。

一歩一歩ゆつくりと、神聖な儀式にのぞむときのような密やかさで、部屋を中心へと近づいていく。

毛足の長い絨毯を踏むときの感触を足の裏に感じていた。花を踏み潰しているからだ――

首から下げた時計ををぎゅっと握りしめる。

目をしばたたかせて、彼は止まった。

植物に抱かれて、人形のような骸が眠っていた。

扇形に広がる髪の中、小さく白い顔があった。まぶたは穏やかに閉じられている。弓形の眉から鼻筋にかけて、いまだ幼さが残っていた。口許はかたい意志を表すように引き結ばれている。

折れそうな首は、華奢な肩へとつながっていた。祈りを捧げるときと同じく胸元で組まれた手も、無造作に放り出された足も、ひどく細かった。

その少年の身体は、天使や神を模して作られた、オブジェのようでもあった。

あれはアリーン自身だ。ほかの誰でもない。見間違えるはずがなかった。

花に身体をまもられながら、傷つき絶望した心をかかえ、彼は命尽きたのだった。

今、憶いだした。

――だとしたら、ここにいる自分はなんなのか。

横たわる彼に手をのばした。弾力のない表皮にふれた、その刹那。視界がはじけた。

ああ、これから夢を見るんだ。

ほとばしる白光の中、アリーンはそんなことを思った。

夢に見るのは過去。自ら封じてしまった記憶。

憶いだすのは、恐ろしい。けれど忘れたままではいけない。

忘れたままでは、ずっと、ここに囚われていなければならぬだろう。

十

緊急避難船は、母星のまわりを衛星のようにまわっている。

月よりわずかに遠い距離では、通信にはタイムラグもさほどなかった。

「こちらアリーン、応答を」

消しゴムみたいな宇宙食をかじりながら、通信機にむかって語りかける。一日一回の母星への連絡は義務だった。

「応答を」

貧乏ゆすりをしながら、ふたたび言う。普段なら、すぐにでも反応があるはずなのに、通信機は沈黙をたもっていた。

やはり、答えはない。

故障だろうか、顔を近づけてみる。

そんなはずはない。通信の直前、点検したばかりだ。

隣にある観測装置の電源スイッチをONにする。

ディスプレイの黒い画面に白字で起動メッセージがあらわれ、待機状態になる。アリーンはピアノの鍵盤を叩くように、操作パネルから命令を下していった。

——パスワードOK。

——指令コードZ T 4 7 3 5 Y 実行します。

無機質な機械音声が告げてきた。

画面が切り替わる。

かつてアリーンが住んでいた、研究所付近を上空からとらえたもののへと。

白塗りの、長方形をいくつも並べたかのような建造物の群れと、計算ずくで植えられた木々。そういった、数学者が作った箱庭にも似た風景が、画面いっぱいに映し出されるはずだった。

けれど、実際に映し出されたのは更地だった。

でこぼことした赤土から、わずかに建物の残骸がのぞいている。地点を間違えたわけではなく、紛うことなくあの研究所が存在していた場所だった。

情報を理解することを、彼の脳は拒絶した。

「……嘘だ」

別なコードを打ち込んで、観測地点をずらす。

どこもしれない、市街地らしきその場所では、焼けおちた家ばかりがある。

人間や犬や猫や、そういった生きものの形をした、消し炭もそこかしこに転がっている。中には多少なりとも原形をとどめているものや、焦げてはいるが、おぞましいピンク色の臓物をはみださせているものさえある。

どこを見ても同じだった。

人間はおるか、原始的な生命さえ見あたらないのだ。

「嘘だ、嘘だ、嘘だ——！」

アリーンは何度もくりかえした。

小脇にかかえていた望遠鏡を、床に向かって叩きつける。

飛び散ったガラスの破片が頬を傷つけた。けれど、そんなことは、多分どうだっていいことなのだろう。

頭が重い。

熱っばい。

ときどき息が停まりそうになる――

そんな中、なかばムダだと知りながら、アリーンは今日も母星を観測していた。

北極から順に、倍率をぎりぎりまで上げて、しらみつぶしに探しているというのに、一向に動物の存在している気配を見出せずにはいた。

あるのは死体ばかりだ。まだ原形をとどめたままの死体。焼けて、ふれれば灰になってしまいそうな死体。消し炭。肉片。骨。

植物はあるが、ごくわずかだ。

こうなるともう、認識せざるをえなかった。

母星は亡んだのだ。動物は、目に見える範囲では死滅した……。

おそらく、戦争でも起こったのだろう。母星に残るわずかな人類は、ほかの生物を巻き込んで殺しあったのだろう。核も少なからず使用されたに違いない。

愚かな、愚かな人間たち。

彼らがいなくなったそのあとに、母星は、ゆっくりと時間をかけて再生していくことだろう。

文明という凶器が残した傷痕も、なにもかもを覆い隠して。

アリーンはへたり込んだ。

「ファイ……」

喜ばしいことなのかもしれない。母星をじわじわと殺していく害虫が自滅したのだから。

けれど、ファイにはもう会えない。たとえ生まれ変わったとしても、逢うことなんてできやしない。

――頭が重い。

熱っばい。

ときどき息が停まりそうになる――

「発病した……やっとな？」

観測機も放り出して、アリーンは大の字に寝転がる。

母星の人間が感染していたウイルスが、どこから来たのかは誰も知らない。急にあらわれ、自己増殖し、駆除する手段もないままに兵器として利用された。気づけば、それは新生児にまで広がっていたのだ。

死に至る病。

ただひとり、ウイルスから逃れられ、研究室の中でモルモットのように生かされていたアリーンは、最後の希望として故郷を放たれた。

治療法が発見されるまで、空から見ているようにと。万一、人が滅びても、正常な遺伝子を持つ彼のクローンを造ればいいからだ。

「あれは天罰だったんだ」

天上は空を映している。太陽を模したライトが、ひととき強く輝いていた。

「驕りたかぶった人間を、粛清するためのものだったんだ」

ここは寒いはずだった。

なのに、身体に熱がこもっている。

頬のひとすじだけが、部屋本来の冷たさを感じていた。

十

ふたたび気づけば、花の中で眠る彼のかたわらに立っていた。

思いを残して死んだから、ここにつなぎとめられてしまったのだろうか。

アリーンはかぶりを振った。

いつだって、願っていたのだ。どこかへ帰りたい、と。ひとりで過ごすのは、もういやだから。

人は未来へ帰っていく。それなのに、彼には帰るべき未来がない。だからだ。きっと。

どれだけ先の話になるかわからないけれど、母星が人に代わって贖罪を終えるそのときに、彼は救われるのかもしれない。

そうしたら、母星の大气になりたい。水になりたい。石になりたい。

彼は踵を返した。

帰るのだ。今しばらくは、ここから母星を眺めていようと、そう思った。

どこかへ還れる、その日のために。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2819c/>

どこかへ帰りたい

2010年10月11日16時10分発行